

### イスラム・スペインの辺境都市(2)

松田, 知彬

---

(出版者 / Publisher)

法政大学教養部

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

法政大学教養部紀要. 人文科学編 / 法政大学教養部紀要. 人文科学編

(巻 / Volume)

100

(開始ページ / Start Page)

93

(終了ページ / End Page)

117

(発行年 / Year)

1997-02

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00004826>

## イスラム・スペインの辺境都市（2）

松田知彬

### 1

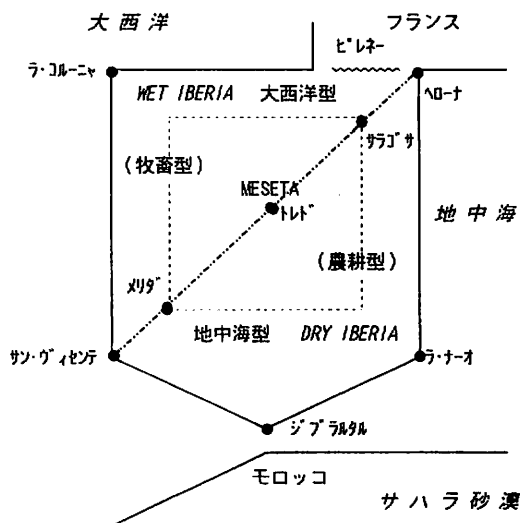
イベリア半島の風土は多元である。スペインでは、現行の自治州（comunidad autónoma）の区分がその色分けを映し出している。大西洋岸を占め、半島全域の六分の一を占めるにすぎないポルトガルも、決して一様ではない。とくに北部のミーニョ地方と南部のアレンテージュ地方とが風土上いちじるしい対比を示す。それぞれ一片一片で異なる自然条件がそこに住む人々の生活にきびしく反映し、生活形態を異ならしめ、ひいては社会の発展相や文化の色合いにも差違を生じさせてきた。しかも、この半島には古くから幾多の人種・民族が流れ込み、それとともに到来した新しい要素の融合・積み重ねの度合いも地域によって異なる。カスティリャ語をはじめ、カタルーニャ語、ガリシア語、バスク語など、現代スペイン諸語の分布、さらに様々な方言の分布にそれが現われている。

風土が多元であるとはいえ、ただ雑然と入り交じっているわけではない。もとよりイベリア半島は概して地中海性気候、すなわち「オリーブ気候」に属し、ピレネー以北の西ヨーロッパとは趣を異にする。しかし、大西洋と地中海を隔てながら西南に向かって大きく突き出た岬であるだけに、典型的なオリーブ気候を呈する部分は、その全土の五分の一にも満たない。元来、地中海一帯はサハラ砂漠と大西洋の、いわば二大巨人の闘争の場である。夏はサハラが勝利を収めて、きびしい乾燥に見舞われる。冬は大西洋が勢力を盛り返し、湿りに富む。イベリア半島はこの二大勢力のまさしく中間に蟠っているために、大西洋の力が強く及ぶ部分とサハラの力がより強く及ぶ部分に大別できる。「ウェット・イベリア」と「ドライ・イベリア」にほかならない。西北部のガリシアと西南部のコスタ・デル・ソルがその両極にあたる。

イベリア半島の形状は、ほぼ五角形をなし、さらにデフォルメすれば、野球

のホーム・プレートに見立ててよかろう。キャッチャー側（南側）から見ると、左下の頂点（西南角）のサン・ヴィセンテ岬と右上の頂点（東北角）のヘローナ湾との間に引かれた対角線が、半島の風土を大きく二分するさいの目安となる。サン・ヴィセンテ (São Vicente) とヘローナ (Gerona) の頭文字をとって「S~Gライン」と名づけておく。そして、イスラム・スペイン (アル・アンダルス al-Andalus) の辺境都市 (三つの辺境州の首都) は、いずれもこの一線上に並び立つ。北からサラゴサ (Saraqusta), トレド (Tulaytura), メリダ (Márida) の三都市にほかならない。(図1参照)

図1 イベリア半島のイメージ図



これらの都市はすべて、ローマ人によるヒスパニア経営の進展とともに生まれ、西ゴートの支配をへてイスラムに引き継がれたもの。それゆえ先の論文では、ひとまずローマ時代に立ち戻り、イベリア半島全体の風土の諸相とにらみ合わせつつ、この三都市の在り方を考察してみた<sup>(1)</sup>。要言すれば、つぎようになる。

前述の「S~Gライン」を分界の目安として、その西北部は「大西陽型」の風土で、生産形態からいえば「牧畜型」、そして「貧しきイベリア」であった。それに対して、東南部は、「地中海型」の風土にもとづく「農耕型」の生

産を基本とする「豊かなイベリア」であった。この鮮やかな対照のうちに、両者の分界線上に並び立つサラゴサ、トレド、メリダの三都市に共通する歴史的意義の一つを見出すことができる。

第二次ポエニ戦争を契機にイベリア半島に足を踏み入れたローマ人は、地中海のほとりから北西に向かってフロンティアを押し進めてゆく。そして、ようやく「パックス・ローマナ」の初期に半島の西北隅を占めるガリシア地方の平定を成し遂げ、フロンティアは消滅した。この間、フロンティアが前進するのにともない、その内側の各地に都市が建設され、そこに兵士や植民者が送り込まれる。同時に、地中海岸の港市を基点として、それらの都市を互いに結び合わす道路が整備された。つまりローマの拓境は、「点」（都市）と「線」（道路）にもとづき、もともと地中海世界の基盤であった「点」（港市）と「線」（航路）の織りなす網を内陸深く広げていったわけである。

むろん、この網は農耕生産に恵まれた沿海部や平野部では密になり、メセタ（中央台地）や山岳地帯では疎になる。しかし、ヒスパニア全体を見れば、地中海岸から遠ざかるにつれて疎になる傾向が強く、例の「S~Gライン」を越えると極端にあらくなる。主要道路は、サラゴサを起点としてカンタブリカ山脈の南麓に沿って西へ向かう道と、メリダを起点としてメセタとポルトガル台地の間をぬって北上する道の二つのみ。都市らしい都市といえば、二道の合するアストゥリカ・アウグスタ（アストルガ）と終点のブリガンティウム（ラ・コルーニャ）だけである。ブリガンティウムにしても、錫産地コーンウォールへの航路の出発点として重きをなしていたものの、ガリアの政情が安定すると、ほとんどローマ人の関心を引かなくなったという。

結局、主要都市を連ねて「豊かなイベリア」をぐるりと巡る不等辺六角形の循環道路が、ローマ人によるヒスパニア経営の基本となっていた。コルドバ・セビリヤ地区が政治・経済・文化の重心地帯であったとはいえ、あまりにも南に偏っており、そこから放射状に道路を設けるのは地勢の点でも困難だったからである。したがって、この循環道路の西北の一辺にあたるサラゴサ、トレド、メリダを結ぶ公路は、「S~Gライン」と重なり、「貧しきイベリア」を経営する基軸となっていた。そしてイスラム・スペインは、このようなローマン・スペインの骨組みをそっくり引き継いでいる。

## 2

ベルベル人の武将、ターリク・ビン・ジヤード (Ṭāriq b. Ziyād) の率いるイスラム軍がジブラルタル海峡をわたり、イベリア半島に上陸したのは711年。この事件はスペイン史の「決定的瞬間」と目されている<sup>(2)</sup>。ターリクは、グアダレーテ (Wādī-laqqa) の野に西ゴート王ロ德里コの軍勢を撃破し、北に向かう。つづいて翌年には、ターリクの上司にあたるアフリカ (Ifrikīya) 総督、ムーサー・ビン・ヌサイル (Mūsā b. Nuṣayr) の率いる本軍が侵入した。両者はトレドの付近で落ち合い、さらにサラゴサへ向かって北進する。こうして714年までに、ピレネー以南のイベリア半島がイスラム世界 (dār al-Islām) に組み込まれてしまった<sup>(3)</sup>。

ローマ人のイベリア征服に比べ、おどろくほど迅速であった。西ゴート王国の脆弱性もさることながら、ローマ人が道なき道を分け入り、いたるところで様々な部族の抵抗に遭遇したのに対して、イスラム軍は、すでにローマ人が築きあげていた「点」(都市)と「線」(道路)の網をつたって進んだからである。とくに、経済・文化の重心であるコルドバ・セビリャ地区をまず押さえ、そこに連絡するイベリア半島の中軸、すなわちメリダ〜トレド〜サラゴサの一線を確保すれば、半島全体をほぼ掌握できるはず。ターリクとムーサーの征服活動はそれをはっきり示していよう。

小さな独立勢力が各地に残存していたものの、はじめ「アル・アンダルス」は大ざっぱな五つの行政区画に分けられた。それは次の通りである<sup>(4)</sup>。

#### (1) アンダルシア

地中海とグアディアナ川の間で、アル・アンダルスの中枢部。主要都市はコルドバ、セビリャ、マラガ、エシーハ、ハエン。アル・アンダルスの総督府は最初セビリャに置かれたが、まもなくコルドバに移された。

#### (2) 中央スペイン

地中海とルシタニア(現在のポルトガル)との間の土地で、ドゥエロ川が北限をなす。主要都市はトレド、セゴビア、グアダラハラ、バレンシア、ムルシア、ロカ、ベンサ。

#### (3) ガリシアとルシタニア

主要都市はメリダ、ベハ、リスボン、ルゴ、サモーラ、サラマンカ。

#### (4) エブロ川の流域

主要都市はサラゴサ、トルトサ、タラゴナ、バルセロナ、ヘローナ、パンブローナ。

#### (5) ピレネー以北の南フランス

主要都市はナルボンヌ、ニーム、カルカソンヌ、ロデヴ。

これらの行政区画の分界線を地図上に示すのは難しい。それというのも、イスラムの統治は領土支配、いわば「面」としての支配ではなく、「点」(都市)と「線」(道路)の支配だからである。州境とか県境とかいうものは、ほとんど問題にならない。たとえ存在したとしてもナワバリ程度のもの。このことは、のちの行政区分に一層はっきり表明されている。

後ウマイヤ朝のもとで国土の開発がすすみ、行政が集権化するにつれて、行政区画の規模は縮小し、かつ細分化してゆく。結局、主要都市とその周囲の土地が一つの州となり、しかもそのような州は軍管区 (kuwar = kūrāh の複数形) と重なっていた。10世紀のアブドゥル・ラフマーン3世およびアル・ハーキム2世の治世には、16の州(数については異論もある)と3辺境区 (thughūr = thaghr の複数形) が置かれた。3辺境区は、北から順に「上辺境区 (al-thughūr al-a'lā)」、 「中辺境区 (al-thughūr al-awasat)」、 「下辺境区 (al-thughūr al-adnā)」と呼ぶ。サラゴサ、トレド、メリダがそれぞれの首都となった<sup>(5)</sup>。ここに「S~Gライン」がアル・アングルスの前線として浮かび上がる。それはとりもなおさず、東は中央アジアやインドに及ぶ広大なイスラム世界の西境でもあった。

まさしく後ウマイヤ朝の絶頂期にあたり、イスラム世界全体を見渡しても活力が漲っている時期に、なぜアル・アングルスでは前線が後退しているのか。その理由はいろいろ考えられよう。北部の山岳地帯に割拠するキリスト教勢力による「レコンキスタ」の波はまだ高まらず、一旦はガリシア地方に入植させられたベルベル人たちも故郷に帰ることを許されている。一般情勢から見て、少なくとも外圧によるものとは考えにくい。それならば、原因はもっぱら後ウマイヤ朝の内政問題に求めてよかろう。

先に触れたように、行政の集権化がすすむにつれて、各州の規模は縮小され、細分化していった。この行きつくところは主要都市が単位となる。ところが、「S~Gライン」の彼方には都市らしい都市がほとんど存在しない。なるほどこの地にもローマ人は都市(点)と道路(線)の織りなす網を広げていっ

た。しかしこの網は、もともと極端に粗く、そのうえ時の荒波にもまれて擦り切れ、ところによっては消滅していた。イスラムのイベリア支配の成否が、ローマ人の作り上げた「点と線の網」の修復にかかっていたのにも関わらず、「S～Gライン」以北ではその努力を怠った。さして魅力のない「貧しきイベリア」だったからである。

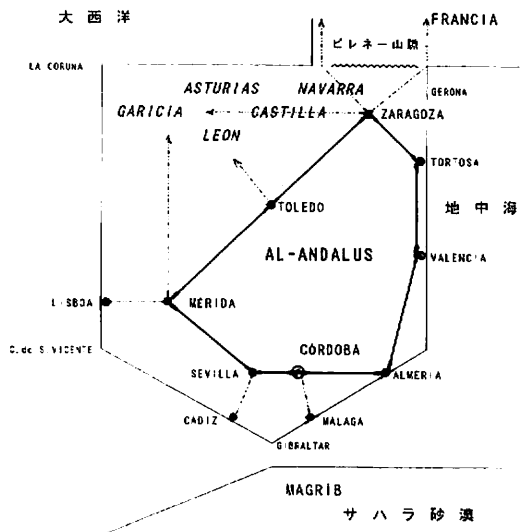
もとより「貧しきイベリア」と一口にいても、土地柄はさまざまで、険しい山並みと深い谷によって寸断された、孤立性の強い盆地や台地から成る。住民の系統も一様ではなく、気候と地勢が家畜の放牧に向いていたという点に共通性をもつにすぎない。山あいや台地を掘り割って流れ下る河川は、ほとんど舟航できず、徒歩で渡るのも橋を架けるのも容易ではなかった。このようなところに、あえて都市を造ったとしても、賑わいは望めず、行政上の中心としての機能も果たせない。道路を整備したところで、大西洋の岸辺で行き止まり。あとは果てしない海が広がる。大西洋はまだ交通の舞台ではなかった。したがって、ほぼ三角形をなす「貧しきイベリア」は、西と北の二辺で外界と隔絶され、東南の一辺のみが「豊かなイベリア」に接していたことになる。この三角形の内部にうごめくキリスト教勢力にとって、それはまさに垂涎的。「レコンキスタ」の主たる動機はそこに見出されよう。

とまれイスラムは「豊かなイベリア」を確保し、開発することに努力を傾け、ローマ人の残した「点と線の網」の修復にいち早く成功した。その成功の一因として、セプティマニアからバエティカに至る地中海の沿海地が、東ローマ帝国の支配（552～624年）のもとで、ふたたび地中海世界の経済・文化のメカニズムに組み入れられていたことにも留意すべきであろう。

前に述べたように、ローマ人によるヒスパニア経営の基本は、主要都市をつらねて「豊かなイベリア」をぐるりとめぐる不等辺六角形の循環道路であった。それがそっくりアル・アンダルスの大動脈となる（図2参照）。バエティカ地方、とくにコルドバ（Kurtuba）・セビリャ（Ishbīliya）地区が心臓部であることも変わっていない。ただし、メリダ～トレド～サラゴサを結ぶ西北の一辺の価値はさらに高まった。それというのもこの一辺が、ローマ人にとっては「貧しきイベリア」を経営する基軸にすぎなかったのに対して、今やアル・アンダルス経営の成否を左右するほどの意味をもつようになったからである。しかるに、その要衝を占める三都市の政情はつねに不安定だった。

後ウマイヤ朝の直面した秩序維持の問題には、さまざまな側面がある。その

図2 アル・アンダルス軸線



中で、あからさまに自立を目指した叛乱は、主にこれらの三都市を中心に勃発した。8～9世紀の記録から拾い上げてみると、あまりの多さに驚く。まずトレドは、761, 784～786, 788, 797, 872, 873, 887年に中央政府に刃向かい、この間829～837, 853～857年には自立を保つことに成功している。メリダでは、807～808, 810～812, 823年(二度)に叛乱が起こり、さらに828年の叛乱のち、あしかけ6年にわたって独立政権が維持された。868年に、後ウマイヤ朝のアミール、ムハンマド1世の命でその城塞施設が取り壊され、以後反抗は下火になった。しかしその反面、これを転機としてメリダはしだいに活力を失い、やがて近くの新興都市バダホス(Batalyaws)にその地位を譲ることになる。サラゴサも、781～782, 788～792, 798～800, 802, 843～844, 881年に叛乱を起こした。叛乱の原因はいろいろで、住民相互の敵対による都市内部の軋轢が中央の権威に対する反抗にまでエスカレートした場合もあるし、中央の政変がきっかけになった場合もある<sup>(6)</sup>。いずれにせよ、嚴重に防備が施され、かつ知事の権限が大きい辺境都市は、一般の都市に比べて自立性がはるかに強かった。

後ウマイヤ朝の盛時を代表するカリフ、アブドゥル・ラフマーン3世の治世



(912~61)にもトレドが背いた。2年間つづいた包囲ののち、飢えに苦しむトレドの人々は、932年6月に降伏した。以後、この中央辺境区の首都には後ウマイヤ朝の強力な守備隊が駐屯し、その知事の役所はアル・アンダルスのディーワーン（官庁）の中で軍事的に最も重要なものの一つに数えられたという<sup>7)</sup>。またアブドゥル・ラフマーン3世は、メディナチェリ（Madīnat al-Salim）を再建し、それを首都とする新しい一州を設けた。この都市はハロン川の左岸に位置し、トレドとサラゴサのちょうど中間にあたる戦略上の要地を占める。さらに、城塞都市トゥデラ（Tudila）に新たに守備隊を送って防備を強化した。トゥデラはサラゴサから西北へ80キロ、エプロ川の右岸にあり、さきにカリフが半島北部へ親征した時（920~921）、遠征軍の基地に定めた都市である。

アブドゥル・ラフマーン3世は軍事的独裁体制を繰り広げるにあたって、メリダ~トレド~サラゴサの一線をとくに重視した。それは、ただ単にフロンティアとして「貧しきイベリア」にうごめくキリスト教勢力に備えるためばかりではない。心臓部から半島の中央を斜めに横切って北に延びるこの動脈を、アル・アンダルス経営の中軸と認めていたからであろう。

### 3

アル・アンダルスは「人種と信仰の複雑な寄り合い世帯」である。もともとイベリア半島には、古くから様々の人種・民族が流れ込んでいたうえに、新参のムスリムの人種・民族系統も決して一様ではなかった。マグリブを故郷とするハム系のベルベル人が大多数を占め、アラブは支配者層を構成していたものの、その数は少ない。しかも支配者層では、かえって混血がすすみ、アブドゥル・ラフマーン3世にいたっては、わずかに0.38%しかアラブの血が入っていなかったといわれる。アラブのほかにもエジプト、シリア、イラク、イランなどを故地とする人々が東方からやってきた。ほとんどみなモロッコ経由で渡来したので、モロ（Moro）とかムーア（Moor）とか総称されているにすぎない。

先住者のうち、イスラムに改宗した人々をムラディー（muladi アラビア語の muwalladūn に由来し、改宗者の意）と呼ぶ。その多くは西ゴートの農奴であり、自由を得るためにイスラムに改宗したらしい。別に、キリスト教の

立場からレネガード (renegad 背教者) という呼び名もある。イスラムへの改宗を拒否して、キリスト教徒のままアル・アンダルスに留まった人々をモサラベ (mozárabe アラビア語の *musta'rib* に由来し、アラブ化した者の意) と称する。その多くは都市民であり、キリスト教の教会組織にしっかりと組み入れられていた。言語、教会典礼、芸術などローマ以来の伝統を担いつつも、都市に住むだけに、一方ではイスラム都市文明に巻き込まれてゆく。そこに「アラブ化した者」という呼び名のいわれがある。さらに西ゴートの時代から引き続いて都市民にはユダヤ人も多かった。彼らはもとよりユダヤ教を信奉し、主として商業活動に従事していた。

このような多様性は、とりわけ都市部で目立つ。農業地帯や放牧地帯では、その生業の性質上、信仰と風俗を同じくする人々が小集団をなし、分散して生活するのが通例だからである。たしかに、人口比率から見れば、都市民よりも農耕民や牧畜民の方がはるかに多いかもしれない。しかし、イスラム世界における生活の重要な諸相の一つは、その都市的性格である。バグダード、カイロ、ダマスカス、アレクサンドリアなどは、人口・規模・国際性のどれをとっても、同時代の西ヨーロッパには比較できるものはない。アル・アンダルスにも、人口 50 万と伝えられるコルドバをはじめ、セビリャ、バダホス、メリダ、トレド、サラゴサ、バレンシア、アルメリア、グラナダなどの大都市が、前述の大動脈に沿って並び立っていた。

正確な人口計数に関しては、そのまま信ずるに足る記録がない。ために、しばしば過大に見積もられてきたきらいがある。むろん、時勢による消長も考慮しなければならない。11 世紀末の主要都市については、トロレス・バルバス氏の推計があるので、それを次の挙げておく<sup>(6)</sup>。

セビリャ	83,000 (人)
トレド	37,000
アルメリア	27,000
グラナダ	26,000
バダホス	26,000
エシーハ	18,000
サラゴサ	17,000
ヘレス	16,000
バレンシア	15,500

マラガ	15,000~20,000
マジョルカ	5,000

当時コルドバは破壊されていたし、メリダは近くのバダホスにその地位を奪われていたので、取り上げられていない。それは当然としても、まだほかに人口の多い都市が存在したであろう。例えばカルモナは、アル・イドリーシーによると非常に大きな都市だったらしい。しかし、上のリストを目安として、トレド、バダホス、サラゴサなどの辺境都市がアル・アンダルス屈指の大都市であったと、ひとまず判断しても大過なからう。

残念ながら、都市の内部におけるムスリム、モサラベ、ユダヤの人口構成比については、さらに不明確である。ただし、アル・アンダルス在住のユダヤに関する研究書は多く、とくにアシュター氏が主要都市のユダヤ人口を突き止めようと努力してきた。リストアップすれば、つぎのようになる<sup>(9)</sup>。

トレド	3,828 (人)
サラゴサ	1,272
トゥデラ	1,044
ウエスカ	1,422
トルトサ	174
バレンシア	479
アルメニア	2,000
コルドバ (一街区のみ)	974
グラナダ	5,392
セビリャ	5,222

12~13世紀の資料に基づいてはいるが、年代はまちまちである。また、厳密な数値のように見えるものの、家族数もしくは戸数から割り出した概算にすぎない。たとえそうであっても、アル・アンダルスにおけるユダヤ人口の分布のあらましが分かる。すなわち、トレド、サラゴサ、トゥデラ、ウエスカ (Washka) は辺境都市、トルトサ (Turṭūsha)、バレンシア (Balansiyya)、アルメリア (al-Mariyya) は国際貿易港、そしてコルドバ、グラナダ (Gharnāta)、セビリャはアンダルシアの中心都市であった。

前述のように、もともとモサラベは都市住民を主体とする。それゆえ、アル・アンダルスの諸都市には多かれ少なかれモサラベ社会が存在した。なかんずく、8世紀半ばにモサラベ人口の多い都市として知られたのは、トレド、コル

ドバ、セビリャ、メリダである。いずれも、ローマの伝統を保ちつつ、西ゴート国家の重鎮となっていた都市にほかならない。西ゴートの首都であったトレドは、11世紀までアル・アンダルスの大司教座の所在地であった<sup>(10)</sup>。時をへて11世紀の末になると、モサラベの大集団の存在した都市としてセビリャ、コルドバ、マジョルカ、マラガ、グラナダ、トレドが挙げられており、とりわけトレドでは12世紀においても事情は変わらなかったという<sup>(11)</sup>。

都市に住むスリムの人種・民族構成も複雑である。主にアラブ、ベルベル、ムラディーから成り、それらの人口構成比は都市ごとに異なっていた。もっともアラブとはいえ、家系を意味するにすぎない。アラビア語の人名が長くなればなるほどアラブの血は薄くなるといわれるほどである。概して辺境都市は、防備の必要からベルベル系の戦士集団を抱え込み、またムラディーの数も一般の都市に比べて多かった。これらのムスリムは常に不穏分子で、辺境都市に叛乱が頻発したのはそのためである。853年から933年まで、トレドは半ば独立したムラディーの国であった。805年にメリダで起こった叛乱は、ベルベル人の軍司令官、アスバグ・ビン・ワーンスース (Aṣḥaḡh b. Wānsūs) に率いられ、ベルベル、ムラディー、モサラベがそれに加わった。この叛乱は7年間つづき、813年によく鎮圧されている<sup>(12)</sup>。「人種・民族・宗教の複雑な寄り合い世帯」といわれるアル・アンダルスの特色が、辺境都市においてひときわ鮮やかに認められよう。

一般にアル・アンダルスの都市は、周囲に城壁をめぐるし、要所要所に見張り塔をもつ。その内部に、人種・信教の異なった人々が、いくつかの街区に分かれて住む。各街区は城壁で隔てられ、随所に設けられた門を通じて行き交いがなされる。ダーラブーン (al-Dārabūn) と呼ばれた夜警があり、夕べの祈りが済むと、都市と街区の門を閉め、夜間の従来を遮断した。つまり、街区というよりはむしろ、一つ一つが趣を異にする「町」であり、都市はそれらの寄せ集めだった。辺境都市といえども、ほぼ同様である。

トレドでは、ユダヤはムスリムの大集団から分離した区域に住んでいた。この区域は「ユダヤの町 (Madīnat al-Yahūd)」と呼ばれ、現在のトレドのユダヤ人街とだいたい同じ場所を占めていたらしい。すなわち、サン・トメ教会の辺りからタホ川におよぶ一帯である。「ユダヤの町」はいくつかの門を通じて他の街区と連絡し、かつ「ユダヤの門 (Bāb al-Yahūd)」によって直接に都市の外部と往来することができた。その門は現在のカンブロン門の位置に

あったと推定される<sup>(13)</sup>。しかし、ヤダヤが強制的に隔離されていたわけではない。宗教法規によって教会からの徒歩距離が定められているうえ、信仰・風俗を同じくする人々がまとまって生活しようとするのは、ごく自然な社会的傾向だろう。それゆえ、それぞれの都市の中で大部分のユダヤが事実上「ユダヤ街区」に住んでいたにすぎない。トレドにあった「ユダヤの町」の居住者はユダヤだけでなく、またこの都市のほかの街区にもユダヤが生活していた<sup>(14)</sup>。ユダヤの生業もさまざまで、高利貸と奴隸商人だけに注目するのは誤りだ。商人が多かったのは事実だが、そのほかの職業に携わっていた者たちにも目を配らなくてはなるまい。その商才と事務処理能力を買われ、しばしば都市行政を担当する重要なメンバーになっていた。

信教が異なるとはいえ、モサラベについても事情はさして変わらない。トレドには早くからモサラベの街区があり、それはイスラム支配の時代を通じて維持された。しかし、それだけではなく他の街区にも多数のモサラベがムスリムと混在していた。ムハンマド1世の治世には大モスクのすぐ近くにモサラベの教会があった<sup>(15)</sup>。11世紀には、モサラベは大司教のもとにある市内の六つの教区でミサを挙げたが、その一つフスタ・ルフィーナ教区はまさに市の中心部にあたる。商人と職人がモサラベ人口の大多数を占め、薬種商、毛皮商、銀細工師、陶工、皮革職人などがいた。また大モスクの近く、現在のサンタ・マリア大聖堂のある場所にはとくにガラス職人、染物屋が住んでいた<sup>(16)</sup>。1085年、カスティリャのアルフォンソ6世に包囲され、開城を迫られたトレドでは、住民は二つの派に分裂した。その際、最後まで抗戦しようと決意した一派はムスリムではなかったし、開城を主張する人々もモサラベのみではなかった。結局、アルフォンソ6世はモサラベのシスナンド・ダビディス(Sisnando Davidiz)にその選択を一任し、彼はカスティリャによる占領後しばらくトレドを治めていたという<sup>(17)</sup>。

ムスリム、モサラベ、そしてユダヤは、時には反目し合うことがあったものの、同じ都市社会の一員として互いに相手の立場を尊重しつつ、良好な共生関係を続けていたと見てよいだろう。もしそうでなければ、アル・アンダルスの経済・文化の重心地帯から遠く離れた、トレドのような辺境都市がイスラム文化の一大拠点に成長するはずがない。イスラム文化の担い手はスリムだけではなく、ましてアラブのみではなかった。「レコンキスタ」後の2世紀間、トレドではモサラベの教養あるエリートたちが、依然としてアラビア語を流暢に用

いていたことが証明されている<sup>(18)</sup>。

## 4

アル・アンダルスは、イスラム世界の西の一翼として、二方向でキリスト教勢力と交渉をもった。ピレネー以北の西ヨーロッパ世界がその一つ。もう一方は「S～G ライン」の彼方のキリスト教勢力である。後者は西ヨーロッパ世界のメンバーではなかった。その社会・経済の様態は西ヨーロッパ世界とも、イスラム世界とも異なっていた。二つの歴史的世界のはざまにあったといえよう。しかも、11世紀ごろからサンティアゴ・デ・コンポステラへの巡礼が盛んになるまで、西ヨーロッパ世界の人々と直接に関係をもつことはなかった。それゆえ、対外交渉の相手はアル・アンダルスのみで、それも主として経済闘争だった。

「S～G ライン」の彼方の住民は、放牧をほとんど唯一の生業としていた。なにしろ、山岳地帯やメセタで集約的な農業を営むのはむずかしい。その上、敵の侵入をうけた時に、家畜ならば安全な場所に追い立てるチャンスがある。足のない農作物は侵入者によって焼き払われてしまう。このことが顕著な社会的効果をもたらした。カスティリャやアラゴンにおいては、フランスに見られるような封建社会の成熟が不可能だった。なぜなら、封建社会は本質的に農耕社会だからである。カスティリャやアラゴンの支配層は大土地所有者であったものの、その土地は放牧地であって農地ではなかった。すなわち、牧場主であり、領主ではない。これらの牧場主に隷属する人々は牧夫であり、半ば遊牧民である。冬は日乾し煉瓦造りの見張り小屋で暮らし、夏はテントで過ごす。冬には山あいの平地に住み、夏になるときびしい暑さと乾燥をさけて、より涼しい、より湿り気のある山の放牧場に家畜を追い上げる。中世の西ヨーロッパに通有の複雑な組織をもつ、経済的・社会的単位としての荘園の村々がそこにはほとんど存在しなかった。

このような貧しい生活者が、目前に広がる「豊かなイベリア」を求めるのは当然である。彼らの侵入・略奪をうけてアル・アンダルスのフロンティアはたえず揺れ動いた。サラゴサ～トレド～メリダの一線は維持したものの、長年にわたる相互の攻防により、この線に沿って幅広い「無人地帯」ができてしまったほどである。しかし、両者の交渉はそれだけで止まらず、フロンティアを

通じての交易関係が常に保たれていたことにも留意すべきだろう。

「貧しきイベリア」のキリスト教勢力との交易活動がたぶんにインフォーマルなものだったために、それに関する直接的な史料は少ない。しかし、アル・アンダルスに送り込まれた奴隷の一部が半島北部の住民であったのは間違いなさそうだ。9世紀の法学者、イブン・サイード (Ibn Sa'īd) の記録に「ユダヤ商人がたくさんのガリシア人の女性をメリダで売っている」とある<sup>(19)</sup>。10世紀の旅行家・地誌作家、イブン・ハウカル (Ibn Ḥawqal) もまた「(アル・アンダルスからその地のムスリムの諸地域への) よく知られた輸出品の中に、スラヴ人の去勢された男子はもとより、フランス (Ifrnja) とガリシアからもたらされた少年少女の奴隷がある」と報告している<sup>(20)</sup>。アラビア語のガリシア (Djilīkiya) という地名は、レオンやアストゥリアスなど半島北部の諸地方を指す場合もあるので、必ずしも現在のガリシア州とは限らない。それにしても、イスラム側の史料はガリシアの奴隷以外の商品についてほとんど言及していない。「貧しきイベリア」の生産形態から見れば、そこから輸出される品々も家畜、皮革、毛織物などのはずであり、さして人目を引くようなものではなかったからだろう。一方、北のキリスト教徒側の文書にはアル・アンダルスから輸入された品々、すなわち各種の織物、皮革製品、紙、香料、武器、武具などについての言及に満ちている。これらの商品と関連して、アル・アンダルスの度量衡が北方のキリスト教諸国で採用されていたことにも注意したい<sup>(21)</sup>。

イベリア半島の北方と南方を行き来する商人や旅行者に関しても、ウマイヤ朝時代の記録は乏しい。そのほとんどが11世紀以降に属する。サンティアゴ・デ・コンポステラへの巡礼が盛んになるにつれて、そのルートに沿う諸都市や市場が成長したからであろう。ブルゴス (Burghush) とレオン (Liyūn) がとくに名高く、アル・イドリーシーはそこに「市場と商人」が存在することを記述している。巡礼は商業活動としての側面をもっているので、サンティアゴ (Shānt Yāqub) 自体が「市場、販売、購入」のためにムスリムにもよく知られていた<sup>(22)</sup>。ほぼ同じ時期にあたる1140年ごろのサンティアゴへの巡礼案内書は、地方市場で販売される商品の中で、ムスリムの各種の織物に注意を促している<sup>(23)</sup>。それらの織物がアル・アンダルス産であれ、ずっと東方の製品であれ、アル・アンダルスとの貿易を通じて到達したものと考えてよからう。

キリスト教徒の支配者たちは沿道の商業を保護した。カスティリャ王アルフォンソ6世 (1065-1109) の領域を通して旅をする商人と巡礼は「彼ら自身

にも、彼らの携えている品々にも何らの危険が及ぶことはなかった」といわれている<sup>(24)</sup>。キリスト教徒の支配地域とムスリムの支配地域を連絡する道路も双方の君主の協約によって安全を保ちえた。例えば、1069年にナバラ王サンチョ4世とサラゴサ王ムクタディルが結んだ協約には「(二つの王国の)間を走る道路は不安なく安全であるべきこと。それに沿って旅をする者は何人にも妨害ないし危害が及ばないこと。」とある<sup>(25)</sup>。この協約は商品の輸送について、とくに触れてはいない。しかし、なによりもまず商品の輸送を円滑にしたいという点で、政治的に対立関係にある双方の利害の一致をみたことは容易に察せられる。

ポルトスゴ (portazgo), すなわち都市憲章にしばしば添えられている関税表も、フロンティアを横切る内陸貿易についての情報を提供してくれる。特別な場合を除いて、関税は特定の地域との貿易を規制するためではなく、歳入を増やす手段であった。ムスリム地域との貿易に言及しているポルトスゴをもつ町の多くはアル・アンダルスの境界に近いカスティリャ南部に位置していた。その一つであるアルアリリャ (Alarilla) のポルトスゴは、12世紀後半のものだが、「ムーア人(の土地)から到着する荷を積んだ家畜一頭」につき、1モラベティノ (morabetino) の関税を課し、また同額の関税を「ムーア人の土地 (terras maurorum) に赴こうとしている者」にも課している<sup>(26)</sup>。同じように、1173年から施行されたポルトスゴは、ムーアの土地と取引した家畜と品物について、一定額の料金をカラトラバ騎士団に支払わねばならぬことを規定している。この料金は、アル・アンダルスの境界に近いもう一つのカスティリャの町、コンスエグラ (Consuegra) で納める決まりになっていた<sup>(27)</sup>。1212年のラス・ナバス・デ・トロサ (Las Navas de Tolosa) の戦いでカスティリャ軍がムワッヒド軍を破り、フロンティアはずっと南に下がった。それにも関わらず、1226年の日付をもつオカーニャ (Ocaña トレドの北西の町、もはや境界地域ではない) のポルトスゴは、「ムーア人の土地から運ばれてくる、またムーア人の土地へ運ばれるすべての品々」に相変わらず関税が課せられていたことを示している<sup>(28)</sup>。もっと後の1234年に、ローマ教皇グレゴリウス9世が、ムスリムの支配地域と貿易を営む許可を、トレド地方の城塞に与えた<sup>(29)</sup>。この教皇がクリスティアンとムスリムの間の貿易を抑制しようと努力していることから見て、これはきわめて異例である。イベリア半島のフロンティアをはさんでの貿易が、長年にわたる慣行として定着し、いかに根強かつ



たかを明示していよう。

フロンティアを越えて往来する貿易商人がユダヤであったと一般に考えられている。確かにイスラム法は、ムスリムが非イスラムの領域 (dār al-ḥard) へ旅をしたり、それと貿易したりすることを「望ましくない (makurūh)」とする。しかしそれは「禁止される (ḥaram)」行為ではない<sup>(30)</sup>。それにも関わらず、アル・アンダルス<sup>(31)</sup>の法学者は非イスラムの領域への旅に対して、イスラム世界の他の地域の法学者よりも厳しい態度をとる傾向があった。サフヌーン (Sahnūn), イブン・ハズム (Ibn Ḥazm), イブン・ルシュド (Ibn Rushd) などいずれもムスリム商人の非ムスリムの領域との貿易に反対している<sup>(31)</sup>。しかしこれは、アル・アンダルスにおける貿易の現実の裏返しにすぎない。1166年のエボラ (Evora) のフエロ (fuero 都市法) はその諸規則が適用される人々の中に、「クリスティアン、ユダヤ、ムスリムの商人と旅行者」を挙げている。同じく12世紀後半のサンタ・マリア・デ・コルテス (Santa Maria de Cortes) のフエロには、「自由なサラセン人は家畜を商う目的で町に来るならば、安全を保証する」とある。さらに1231年のカセレス (Caceres) のフエロは、クリスティアンとムスリムのどちらの領域から来るにせよ、クリスティアン、ユダヤ、そしてムスリムが年の市に参加することを許可している<sup>(32)</sup>。

フロンティアの北方と南方を結ぶ商業的・文化的きずなを築くにあたって、モサラベ商人が果たした役割は大きい。この点については、これまでもしばしば強調されてきた<sup>(33)</sup>。12～13世紀のトレドには沢山のモサラベ商人が居住していたことも確認されている<sup>(34)</sup>。北方のクリスティアン商人がアル・アンダルスの市場で取引したのは事実だとしても、12世紀の中葉まで、その数は多くなかった。イスラム法はクリスティアン商人がムスリムの領域に入ることを阻んではない。ただし、一般に非ムスリムの外国人がムスリムの領域を旅行する際には、通行の安全と保護のための契約 (amān) が必要であった。前述のように、サンティアゴへの巡礼が盛んになり、巡礼路に沿って都市や市場が成長するまで、北方のクリスティアンのあいだには商人そのものが少なかったというのが実状だろう。

## 5

アル・アンダルスからイスラム世界の他の諸地域に輸出される商品は、この地の生産活動の特質と商業・貿易の状況を端的に物語る。日用品から奢侈品まで、原料もあり、製品もあって実に多彩、ここにそれらを一つとりあげることはできない。その中で、もっとも注目をあびた商品が三種ある。すなわち、水銀・奴隷・毛皮がそれ。まず、水銀について検討してみよう。

水銀は明らかにアル・アンダルスの特産物である。もともとイベリア半島は、金・銀・銅・錫・鉛・水銀などの鉱物資源に富み、早くから地中海世界の人々の関心を引きつけていた。フェニキア人が東方にもたらした「タルシシュの財宝」は『旧約聖書』にも名高い。つづいてローマ人が積極的に鉱山開発をすすめる、それがヒスパニア経営の牽引力となっていた。とりわけ、水銀とその化合物である硫化水銀（Hg<sub>s</sub> 日本では丹砂、朱砂、辰砂と呼ばれる）は重要な意味をもつ。きわめて有用な鉱物でありながら、その産地が限られていたからである。10世紀のイスラム地理学者・歴史家、アル・マスウーディー（al-Mas'ūdi）は、それについて「イスラム世界と非イスラム世界のすべてに輸出される」と記述している<sup>(35)</sup>。アル・アンダルスの水銀鉱山の一つ、コルドバの北方80キロにあるアルマデン（al-ma'dīn）は産額がとくに多く、アル・イドリーシーによれば、千人以上の鉱山労働者によって、250尋（pama）に及ぶ縦坑から採掘され、「世界のあらゆる地域」に輸出されたという<sup>(36)</sup>。

奴隷に関しては、やや複雑な事情がある。先に引用したイブン・ハウカルの報告を見ると、アル・アンダルスからその地のムスリム諸地域へ輸出された奴隷は、少なくとも三種類に分けられる。すなわち、フランスとガリシアからもたらされた少年少女の奴隷、およびスラヴ人の去勢された奴隷である。その中でガリシアの奴隷が、必ずしも現在のガリシア地方の出とは限らないが、イベリア半島北部の住民であったことは確かであろう。前述のイブン・サイードの記録もそれを裏付けている。しかし、フランスの奴隷がほんとうにフランク王国の住民なのか、あるいはフランク王国を経由してアル・アンダルスにつれて来られたのか、どちらとも断定できない。たしかに、リヨンの司教アゴバルド（Agobard）はカロリング朝の領域でクリスチャンが捕らえられ、奴隷化されていることに抗議している。彼によれば、ユダヤの奴隷商人によってアルル

とリヨンで二人の青年が誘拐され、少なくともそのうちの一人がコルドバへ奴隷として送られたという。そして、ユダヤによる奴隷狩りの事例は普通であり、「ユダヤがクリスティアンをスペインに売ることを許してはならない」と力説している<sup>(37)</sup>。アゴバルドはモサラベの出身で、アル・アンダルスにおけるクリスティアンの奴隷化にとくに敏感であったようだ。それゆえ、彼の挙げている事例は、ガリシア人やバスク人の奴隷化という現実をフランスに移し替え、それをユダヤ攻撃の根拠にしたとも考えられる。同時代のほかの史料もユダヤがフランク王国内で奴隷業者として活動していたことを示している。しかし、それらの商人による土着のクリスティアンの奴隷化については何もふれていない。例えば、ルイ敬虔王（814-840）がイベリア出身のユダヤ、サラゴサのアブラハムに外国人奴隷（*mancipia peregrina*）の輸送を許可しているが、その奴隷はフランク王国内でのみ売ることができるという条件がついていた<sup>(38)</sup>。

もう一つのタイプの奴隷、すなわちサカーリバ（*ṣaqālība* 去勢されたスラヴ人奴隷）は、厳密にスラヴのみではなかったにせよ、東ヨーロッパの住民と受け取ってよさそうだ。それならば、なぜアル・アンダルスの市場を経てイスラム世界の各地に輸出されるのか。その理由をイブン・ハウカルは「地球上のすべてのサカーリバはアル・アンダルスから来る。なぜなら、彼らはその地で去勢され、手術はユダヤ商人によって行われるからである。」と説明している<sup>(39)</sup>。同じころ、アル・ムカッダーシー（*al-Muqaddasī*）もまた去勢の習慣がビザンティンの僧院から借用されたこと、そしてサカーリバはユダヤが住んでいるペチナ（*Pechina* アルメリアの南）に近いある町で去勢されることなどを報告している<sup>(40)</sup>。しかしながら、サカーリバの取引に携わったのはユダヤ商人ばかりではなかった。11世紀の歴史家アル・マッカリー（*al-Maqqarī*）によれば、ユダヤとムスリムの奴隷商人がアル・アンダルスの境界（*ṭhughūr*）に沿う諸地域で輸出向けの奴隷を去勢していたという<sup>(41)</sup>。

サカーリバは輸出されるだけでなく、後ウマイヤ朝の宮廷向けに大量の需要があった。ハーレムの「宦官」はもとより、宮廷警護の兵士として用いられ、「無言の兵士」と呼ばれた。とくにアブドゥル・ラフマーン3世はサカーリバを主体とする外人傭兵軍を叛乱の鎮圧、国土の防衛にも当たらせた。アッバース朝のマムルーク（*mamlūk* 主にトルコ系の奴隷兵）と後ウマイヤ朝のサカーリバはまさに東西の双璧をなす。マムルークと同じく、サカーリバも富と

実力を蓄え、しばしば高位高官に登用されている。

11世紀になると、サカーリバについての言及がほとんど消滅してしまう。需要と供給の双方に大きな変化が生じたためであろう。9～10世紀にはフランク王国の東境における緊張状態によって、西ヨーロッパおよびアル・アンダルスへのサカーリバの供給が増大した。ところが11世紀に入ると、「東方植民」とスラヴの土地のキリスト教化が進展し、奴隷の供給が枯渇しはじめた。一方、アル・アンダルスにおいては、大量のサカーリバを購入していた後ウマイヤ朝の分解によって、その需要が減少する。この間に、東方のイスラム諸国は、奴隷の供給源を自国の境界地帯に求めはじめていた。さらに、ムラービト朝およびムワッヒド朝の到来が、アル・アンダルスの市場と北アフリカの黒人奴隷との間に新しいチャンネルを作り出したことにも注意すべきだろう。

アル・アンダルスから輸出された主要な商品の一つ、毛皮の検討に移ろう。一口に毛皮といっても、いろいろな種類があり、それぞれに産地が異なる。安価な兎の皮から高価な貂皮にいたるまで、値段もさまざまである。その中で、時代・地域を問わず、最も珍重された毛皮が黒貂 (sable) であったことは論をまたない。古くは、西方のギリシア人やローマ人、東方のペルシア人や中国人の間でいたくもてはやされていた。その黒貂皮がアル・アンダルスからイスラム世界の各地へ輸出されたことに関して、10世紀のイスラム地理学者、アル・イスタフリー (al-Iṣṭakhrī) とアル・ムカッダーシー、ペルシア語の地誌、フドゥード・アル・アールム (Ḥudūd al-‘Ālam 世界の諸地域) などの言及は一致している。とりわけフドゥード・アル・アールムがアル・アンダルスにおける黒貂の産地を明記していることに注目すべきだろう。すなわち、「トゥデラ (アラビア語の表記は Tuṭīla, ここでは B. ṭīla と記す) の町は、山なみの近くに位置する。そこには、驚くほど (bī andāza) 大量の黒貂 (samūr) が見出される。(その毛皮は) さまざまな場所 (ba-jāy-hā) に輸出されている。」とある<sup>(42)</sup>。

珍しい毛皮をもつ小動物は、ユーラシア大陸の北部一帯に棲息していた。しかし、歴史を通覧すると、黒貂の産地はウラル山脈以東のシベリアにほぼ限られていたようである。古くは、現在のウクライナを中心に活動するスキタイ人が、黒貂をはじめとするシベリア産の貴重な毛皮を、黒海北岸のギリシア植民都市にもたらしていた。スキタイ人が用いたウラル越えの道、いわゆる「スキタイ商路」はヘロドトスの『歴史』第4書に紹介されている。シベリア産の毛

皮の中継者としてのスキタイ人の立場は、つぎつぎに東方から南ロシアへ流れ込んだ遊牧民に受け継がれてゆく。サルマタイ、アヴァール、ブルガール、マジヤール、ハザールなどみな毛皮貿易に携わっていた。とくに、中世初期からのブルガール (Bulghār) の動きは、興味深い。ブルガールの一部は、さらに西方に移動して現在のブルガリアの祖となったが、一部はヴォルガの川筋を北上して、現在のカザン市あたりを中心にヴォルガ・ブルガール国を建てた。いま問題にしている 9～10 世紀に、この国からイスラム世界の東境にあたる中央アジアのフワーリズム (ホラズムともいう) へ、黒貂その他の珍貴な毛皮が盛んに輸出されていた<sup>(43)</sup>。しかも、これらの毛皮がフワーリズムからイスラム世界の各地に再輸出されていた。アル・アンダルスのカリフ、アブドゥル・ラフマーン 3 世もフワーリズムから輸入した黒貂の毛皮をもっていたという<sup>(44)</sup>。

早くも 10 世紀に、アル・マスウーディーがこの混乱を解決しようと試み、「北部ヨーロッパからの毛皮が、しばしば (北方から) マグリブに来るのは、それらがアル・アンダルスと隣接するフランクおよびスラヴの諸地域から来るという確信に導く。」と論を結ぶ<sup>(45)</sup>。事実、11 世紀に入ると、アル・アンダルスの黒貂についての言及はほとんどなくなり、それに代わる輸出品として兎の皮が記録されるようになる。この変化は、前述のサカーリバと同じ事情によるものだろう。兎の皮は明らかに地元の産物だった。貴重な毛皮類、とくに黒貂皮はサカーリバとともに、フランク王国を経由してアル・アンダルスに輸入されたと考えてよさそうである。これと関連して、セブル (sable) という言葉が、古いフランス語のスラヴ (slav) に由来することにも注意したい。

もしそうならば、フドゥード・アル・アーラムがなぜ黒貂の産地をトゥデラとしたのか。それは、この町が北方からピレネーを越えて送られてくる商品の取り入れ口にあたり、サラゴサの「出店」の役割を果たしていたからである。すなわち、黒貂の中継地をその産地と誤解したにすぎない。サラゴサは黒貂の毛皮を処理する技術で名高く、コルドバの宮廷はもとより、レオン王国の宮廷でも黒貂を一部に用いた毛皮のコート (mubattana) が流行していたという<sup>(46)</sup>。

## 6

アル・アンダルス (イスラム・スペイン) はヒスパニア (ローマン・スペイ

ン)の遺産を引き継いだ。たしかに、ヒスパニア経営の基盤であった「点」(都市)と「線」(道路)の織り成す網は、「民族大移動」の荒波にもまれて擦り切れ、ところによっては消滅していた。西ゴート王国の主軸たるサラゴサ〜トレド〜メリダを結ぶ一線と、東ローマ帝国のもとに一時復旧した沿海諸都市を連ねるアウグスタ街道(Via Augusta)とが辛うじて保たれていたにすぎない。イスラムのイベリア支配の成否は、この網をいかに修復するかにかかっていた。イスラムのもとで新たにつくられた都市や道路は少ない。ローマのように、経済的な魅力に乏しい「貧しきイベリア」にまで「点と線の網」を広げてゆく意図もなかった。つまり、「豊かなイベリア」を確保し、開発することだけに努力を傾けたわけである。一日はイベリア半島のほぼ全域を征服しておきながら、政情が安定すると、かえって境界を後退させ、「S〜Gライン」に沿って三つの「辺境区」を設けた理由もそこに求められよう。

ここに「S〜Gライン」はアル・アンダルスのフロンティアとなる。それはとりもなおさず、東は中央アジアやインドにおよぶ広大なイスラム世界の西境でもあった。しかも、単にフロンティアとしての意味ばかりではなく、その歴史的意義はイスラムのもとで一層深まる。なによりもまず、この一線と重なるサラゴサ〜トレド〜メリダを結ぶローマ以来の公路が、アル・アンダルス経営の中軸となったことに注目したい。アル・アンダルスの心臓部(コルドバ・セビリャ地区)からイベリア半島の中央を斜めに横切って北に延びるこの大動脈を掌握しないかぎり、コルドバ政府は中央集権の実を挙げることはできなかった。アブドゥル・ラフマーン3世の施策はそれをよく示している。

「S〜Gライン」の彼方にうごめくキリスト教勢力は、西欧世界の一員ではなかった。その社会・経済の様態は、西欧世界とも、イスラム世界とも異なる。二つの歴史的世界のはざまにあったといえよう。ほぼ三角形をなすその生活圏は西側と北側を大西洋に囲まれ、ただ東南面のみがイスラム世界に向かって開けている。11世紀ごろからサンティアゴ・デ・コンポステラへの巡礼が盛んになるまで、アル・アンダルスとの交渉が外界の息吹を伝える唯一のチャンネルだった。それだけに、フロンティアを越えて往来する商人たちの果たした役割は大きい。ユダヤ商人、ムスリム商人、モサラベ商人のもたらした経済・文化の刺激が、「貧しきイベリア」のキリスト教勢力を目覚めさせ、「レコンキスタ」の動きを高めることになる。サラゴサ、トレド、メリダ(のちにはバダホス)の三辺境都市(辺境区の首都)は、そうした南北交渉のターミナル

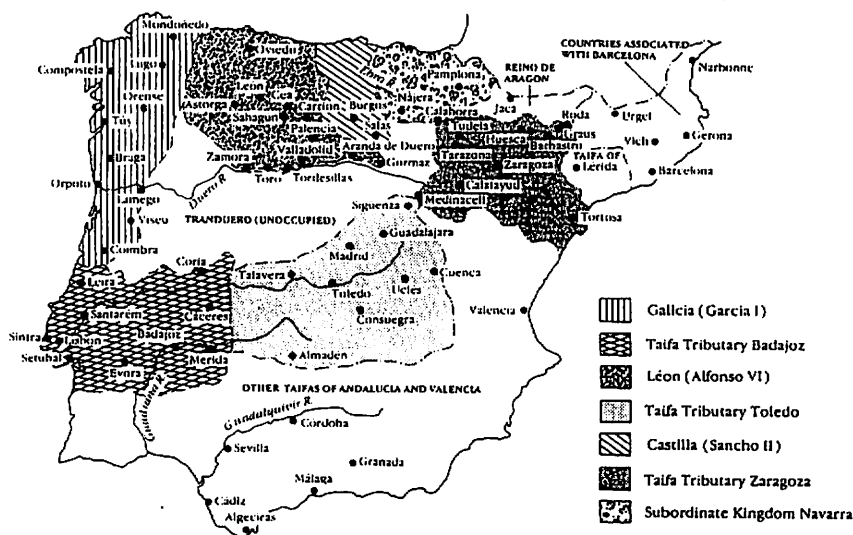
として賑わい、同時に北方におけるイスラム文化の中心ともなっていた。

後ウマイヤ朝が崩壊（1031年）した後も、辺境都市の立場は変わっていない。主要都市に拠って多くのタイファ（taifa 分派の意）王国が分立し、アル・アンダルスは「都市国家の時代」を迎えた。そのさいフロンティアに沿って並び立つサラゴサ、トレド、バダホスの三王国が辺境都市の立場をそれぞれに引き継いだ（図3参照）。しかし、サラゴサとトレドの二王国の繁栄は、長くは続かなかった。ムスリム勢力の分裂とともに激化した「レコンキスタ」の矢面に立っていたからである。まずトレドがカスティリヤ王国の手に帰し（1085年）、ついでアラゴン王国がサラゴサを占領した（1118年）。このことが両王国にそれぞれ相異なる発展を方向づけたことにも注意したい。すなわち、カスティリヤ王国が古来の軸線づたいにアンダルシアを目指したのに対して、アラゴン王国はエbro川づたいに海への出口を求め、いち早く地中海に乗り出してゆく。前者の内陸的性格と後者の海洋的性格の由来にほかならない。のちに、この異質な二国を合わせたスペインの動向が、閉鎖性と開放性の間をたえず揺れ動いたのは、当然の成り行きといえよう。そして今なお、カスティリヤとカタルーニャの反目にその名残を留めている。

イスラム世界と西欧世界との交渉に目を転ずれば、この点でも辺境都市の立場は大きい。サラゴサ～トレド～メリダを結ぶアル・アンダルスの中軸は、イスラム世界の西境と重なりつつ、ピレネーを越えて西欧世界に通ずる道筋と連絡する。北イタリア諸都市が地中海に雄飛するまで、ピレネー越えの山道は、鮮やかな対照をなす二つの歴史的世界の脈動を互いに伝え合うほとんど唯一の経路だった。カール大帝（シャルルマーニュ）のサラゴサ遠征と「スペイン・マルク」の設置がそれをはっきり表示している。この経路によって、両世界の間はかなり活発な貿易が営まれていたことは、特異な二つの商品、サカーリバと黒貂皮を取り上げて論証した。その際、サラゴサが西欧の商品の取り入れ口だった。西欧の商品はそこからアル・アンダルスの中軸づたいに、トレドとメリダをへてアンダルシアへ、さらにその一部はイスラム世界の各地へ転送されていたわけである。

十字軍と呼応するかのように、サンティアゴ・デ・コンポステラへの巡礼が盛んになる。どちらも西欧封建社会の成熟から弾みでた行動であり、それが巡礼という形をとった点でも軌を一にする。ただ、前者が大規模な武装集団であったにすぎない。いずれにせよ、巡礼は交易活動の側面をもつから、閉鎖性

図3 タイファ王国分立期のアル・アンダルス  
 (B. F. Reilly, *The Contest of Christian and Muslim Spain*, p.38.)



の強い西欧世界と外界との経済・文化の交流を活性化した。フランスからピレネーを越えてサンティアゴへ向かう巡礼路に沿って点々と都市や市場が成長する。それは「貧しきイベリア」の目覚めを象徴するばかりでなく、アル・アンダルスの内陸貿易にも生気を吹き込む。ムスリム勢力の弱体化とあいまって、「レコンキスタ」の動きにも拍車がかかる。トレドとサラゴサが相次いでキリスト教勢力の掌中に帰した。それとともに、西欧の学者たちが巡礼や商人に混じってピレネーを越え、トレドやサラゴサにやってくる。その目的はイスラム学術およびイスラム学術の中に保存されていたギリシアの古典学術の吸収にあった。彼らは、アラビア語に堪能なモサラベたちの助けを借りて、アラビア語文献のラテン語訳に熱中した。そして、このようにトレドとサラゴサを発信源とするイスラム文化の刺激こそ、全ヨーロッパ的規模で巻き起こった「12世紀ルネサンス」の原動力にほかならない。

辺境諸都市に共通する歴史的立場を追求するに急で、各都市のもつ個性の違い、とくにそれぞれの内部社会の分析・比較が粗略に流れたきらいがある。それについては、「レコンキスタ時代」における各都市の在り方の検討とともに、いずれ稿を改めて論じたいと思う。



## 【注】

- (1) 拙稿：イスラム・スペインの辺境都市 (1), 法政大学教養部「紀要」第 93 号, 1995 年刊。
- (2) Sánchez-Albornoz, La España Musulmana, según los autores islámicos y cristianos medievales, 2 vols., Madrid, 1982, I, p. 10.
- (3) Lévi-Provençal, E., Histoire de l'Espagne musulmane, 3 vols., Paris, 1950-1953, I, 29.
- (4) Imamuddin, S.M., Muslim Spain 711-1492 A. D., Leiden 1981, p.50.
- (5) Imamuddin, S.M., A Political History of Muslim Spain, Dacca 1969, p.340.
- (6) Collins, R., Early Medieval Spain, Unity in Diversity, 400-1000, London 1995, p.187.
- (7) Arié, R., España Musulmana, Barcelona 1987, p.23.
- (8) Torres-Balbás, L., Extensión y Demografía de las Ciudades Hispano-musulmanas, Studia Islamica 3, Paris 1955, pp.35-59.
- (9) Ashtor, E., The Jews of Muslim Spain, 3 vols., Philadelphia 1973-84.  
Roth, N., Jews, Visigoths & Muslims in Medieval Spain, Cooperation & Conflict, Leiden 1994, p.138.
- (10) Arié, R., op. cit., p.186.
- (11) Burman, T. E., Religious Polemic and the Intellectual History of the Mozarabs, c.1050-1200, Leiden 1994, pp.19-20.
- (12) Makki, M., The Political History of al-Andalus: Jayyusi, S.K. (ed.), The Legacy of Muslim Spain, 2 vols., Leiden 1992-1994, I p.23.
- (13) Arié, R., op. cit., p.200.
- (14) Roth, N., op. cit., p.142.
- (15) Lévi-Provençal, E., op. cit., III p.244.
- (16) González Palencia, A., Los mozárabes de Toledo en los siglos X II y X III, 4 vols., Madrid 1926-1930, I pp.51-58.
- (17) Menéndez Pidal, R., y García Gómez, E., El conde mozárabe Sisnand Davidiz y la política de Alfonso VI con los Taifas, Al-Andalus, Revista de las Escuelas de Estudios árabes de Madrid y Granada XII, 1947 Madrid-Granada, pp.27-41.
- (18) González Palencia, A., op. cit., III pp.83-95
- (19) Ribera y Tarrago, J., Disertaciones y opúsculos, Madrid 1928, pp.24-25
- (20) Ibn Ḥawqal, Ṣurat al-Ard: tr. María José Romani Suay, Configuración del Mundo, Valencia 1971, p.63.
- (21) Vallvé, J., Notas de Metrología hispano árabe II, Medidas de capacidad Al-Andalus 42 (1977), pp.91-98.
- (22) al-Idrīsī, Opus geographicum, 9 vols, Roma-Napoli 1970-1984, VII pp.732-728.
- (23) Le guide du pèlerin de Saint-Jacques de Compostella, ed. J. Vielliard, Macon 1950, pp.32-33.
- (24) O'Callaghan, J., A History of Medieval Spain, Ithaca 1975, p.249.

- (25) Lacarra, J. M., *Dos tratados de paz y alianza entre Sancho el de Peñalén y Moctádir de Zaragoza (1069-1073)*, Zaragoza 1981, p.92.
- (26) Martín Rodríguez, J. L., *Portazgos de Ocaña y Alarilla*, Anuario de la historia del derecho español 32, Madrid 1962, p.524.
- (27) González, J., *El Reino de Castilla en la época de Alfonso VIII*, Madrid 1960, II p.297.
- (28) Martín Rodríguez, J. L., *op. cit.*, p.526.
- (29) Burns, R. I., *Renegades, Adventurers, and Sharp Businessmen, The 13th century Spaniards in the Cause of Islam*, Catholic Historical Review 58, 1972, p.363.
- (30) Lewis, B., *The Muslim Discovery of Europe*, New York 1982, p.61.
- (31) Khadduri, M., *War and Peace in the Law of Islam*, Baltimore 1995, p.269
- (32) Ballesteros y Beretta, A., *Historia de España y su influencia en la historia universal*, Barcelona 1920, II p.529.
- (33) Ashtor, E., *op. cit.*, p.278. Arié, R., *op. cit.*, 251.
- (34) González Palencia, A., *op. cit.*, pp.79, 126-127, 162.
- (35) al-Mas'ūdī, *Murūj al-dhahab*: ed. & trans. C. Bardier de Meynard, *Lespraires d'or*, Paris 1861, p.367.
- (36) al-Idrīsī, *op. cit.*, V p.581.
- (37) Agobard, *Epistolae*: ed. E. Dümmler, *Monumenta germaniae historia*, *Epistolae V*, Berlin 1899, pp.183, 185. Roth, N., *op. cit.*, pp.153-154.
- (38) Roth, N., *op. cit.*, p.154.
- (39) Ibn Ḥawqal, *op. cit.*, p.110.
- (40) al-Muqaddasī, *Shams al-Dīn*: ed. & trans. C. Pellt, *Description de l'Occident Musulmn au IXe-Xe Siècle*, Alger 1950, pp.242-243.
- (41) al-Maqqarī, *Analectes sur l'histoire et la littérature des arabes d'Espagne*, ed. R. Dozy, 2 vols., Leiden 1855-60, I p.92.
- (42) Ḥudūd al-'Ālam, trans. V. Minorsky, London 1970, p.155.
- (43) Barthold, W., *Turkestan down to the Mongol Invasion*, London 1958, p.235.
- (44) al-Maqqarī, *op. cit.*, I p.230.
- (45) al-Mas'ūdī, *Kitāb al-tanbīh wa al-ishrāf*, ed. M. J. de Goeje, *Bibliotheca geographorm arabicorum*, VIII Leiden 1967, p.63.
- (46) Arié, R., *op. cit.*, p.255.